

意味はどう進化し、どう伝わるのか？ (ハンデルマンとハイデガーと形容詞語彙から考える)

西村 純 (Nishimura Jun)

意味は我々にとって内的に理解されているとされる。特に哲学ではそうだ。だがそれは歴史的には一定のギリシャ哲学以来の伝統とキリスト教に拠る本質主義的な思想という土壌が在って当然のこととなっている。スーザン・ハンデルマンは現代ポストモダンのデリダ等を軸に、ユダヤ教ラビ思想的観点から文字文化全体を捉え直す。〈誰がモーセを殺したか〉でフロイトの父殺し、つまりモーセ殺しからデリダやブルーム等の思想を読み解く。デリダにも深く共鳴する彼女の考えではアリストテレス以来、アウグスティヌス、カント、ヘーゲル、フッサール、ハイデガーも全て受肉された本質主義的な文字理解となる。しかしそれは文字を記号として手段化することで貶め、内容理解の為にはテキスト自体は他のものと置換し得ることとなる。それは聖書の絶対化からの解放とも言える。

当然ハイデガーはそれとは対極の要点主義、つまり本質追求と真理への問いという形で言えばテキスト中心主義ではないし、ハンデルマンもそう捉えている。しかしハイデガーが考えている脱自 (extatisch) は一見ハイデガー思想をハンデルマンがテキストを主眼とするデリダ的脱構築やブルーム的読み替えと対極の様に思えるハイデガー思想を逆転させる。今回の発表ではハイデガーの脱自こそ要点主義的本質追求には無い意味の連想作用の様なものを喚起すると捉える。その際に形容詞の意味の進化を材料にして考えたい。